

# 研究の概略

ベネッセ教育研究所研究員

沓澤 糸

(以降、V章以外執筆)

## 1. 研究テーマ設定の背景

目前に迫った21世紀に向けて、日本の教育やこれを取り巻く状況は大きな過渡期を迎えている。そして、第15期中央教育審議会の答申に代表されるように、その最も重要なキーワードの1つとして「生きる力」が挙げられている。

この「生きる力」を特に生涯学習という観点から考えてみると、学校という学習への一種の強制力を持つ場を離れた後も、学ぶ課題・方法を自ら発見・工夫し、自己を駆り立て柔軟に変化させ学び続ける力—すなわち「自己学習力」と言い換えることができるのではないだろうか。

我々はこの「自己学習力」について研究を進めるにあたり、教育心理学で研究されている「自己制御学習 (self-regulated learning)」に着目して、学校外という学習への強制力が働かない場での小・中学生の実態からアプローチすることにした。

この「自己制御学習」研究とは、単に学ぶだけでなく学習者の環境への適応、及び、学習者による学習環境への働きかけの双方について、そこに影響する様々な要因や要因相互の関係性も焦点に収めている。

学校週5日制の完全導入など、学校外での学習が今後ますます重要性を増してくると思われ、本研究の必要性を強く感じるところである。

## 2. 研究の目的

- 1) 小・中学生の学校外、特に家庭での自己学習行動・意識の実態把握
- 2) 自己学習行動・意識に影響を与える(人的・物的)環境の実態把握
- 3) 子どもとその環境との相互の関係性や、発達差・性差についての分析

## 3. 調査方法

- 1) 時期：1996年5月～6月
- 2) 対象：神奈川・埼玉・千葉・東京の都市部にある公立小・中学校の小学4年生～中学2年生の児童・生徒、各学年800サンプル(計4000サンプル)、及びその保護者(計4000サンプル)
- 3) 方法：学校を通し、上記対象に対して子ども、及びその保護者用の自記式質問紙を配布・回収(調査校についてはランダムサンプリング)。
- 4) 回収状況：子どもの学年別、及び保護者全体の回収率は以下の通り。  
小4 (75.6%)、小5 (92.0%)、小6 (77.0%)、中1 (64.9%)、中2 (86.4%)、保護者 (74.1%)

